

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (27)

れを聞き、自分を名乗れず立ち去った次郎の後を深雪は追いますが、それも空しく、大井川に身を投げようとするところを宿の主人に救われて、次第に視力を回復していくという話です。

この書物が刊行された1900（明治三十三年）年は、フローレンツが来日して十三年目になり、社会を熟知する時期に入っていました。

それより五年前の1895（明治二十八年）年、日本政府は日清戦争の講和条約締結直後にロシアやフランスと共にドイツが強硬に圧力を示した所謂、三国干渉を受け入れざるをえませんでした。そのため、国民は報復さえ意味する「臥薪嘗胆<sup>④</sup>」を合言葉に、戦争で消耗した国力の回復に努めていました。彼は在日ドイツ人として、国内の厳しい世論を肌で感じていたと思われます。

このような環境の中で、極度の忠誠心と情念あふれる恋物語、さらには強い家族愛を表現した詩集など、厳格な粗筋の書物を刊行したことは、文化を紹介するだけでなく、日本人の心理構造と行動規範を母国に理解させ、将来の日独間の対立を回避させたいとする強い思いがあったのではないのでしょうか。

### ■縮緬本の格調の高さを取り戻した名著

本来、縮緬本とは日本の「伝統的な技術」で、「伝統的な文化」を外国へ紹介しようとしたものです。従って、翻訳に関わった人物と翻訳された言語を除いては、純日本的なものです。この刊行は最初の「日本昔噺」シリーズに終止符が打たれると、同じシリーズの「番外」や外国人による日本文化を基調にした創作物も生まれます。しかし、外国の娯楽性の強い話で、洋酒の樽や外国料理人の挿絵が描かれたものが刊行されるようになると、この書物が持つ雰囲気との不似合いが目立つようになってきます。

フローレンツの思いや危機感の有無とは別に、彼が翻訳した上記の三冊は古くから伝わる詩歌や芸術を通じて日本人の国民性を紹介したものであり、この書物の刊行目的を考えると縮緬本の名著と言えるものです。これらの書物の刊行によって、それまでの沈滞した雰囲気を一変させるものでした。長谷川が出版にあたって特別の配慮を示したことも理解できます。

### ■第一次世界大戦期のドイツ最大の知日派

縮緬本の翻訳に関わっている間も彼の研究は

進み、1899（明治三十二年）年には勤務する東京帝国大学へ『日本書記』の神代の巻に関する研究論文を提出して日本でも学位を取得しています。そして、1906（明治三十九年）年には、三年前から分冊で刊行してきた『日本文学史』を合冊してアーメラング社から普通（平紙）本で出版しました。この年は日露戦争後のポーツマス条約が締結された翌年であり、ドイツ人が東の脅威と感じてきたロシアに勝利した日本を知ろうとする上で、この書物への関心は高かったものと考えられます。

フローレンツが多くの学問的成果を挙げている間に明治時代も終わっていました。東京帝国大学での在任期間も外国人としては極めて長くなっていました。彼は1914（大正三）年6月に約二十七年間にわたって滞在した日本に別れを告げて帰国します。この年の8月、日本はドイツに対して宣戦を布告し、両国は第一次世界大戦を戦うこととなります。彼は、のちにハンブルク大学となる同地の植民学院で日本学の教授に就任しますが、戦時下での敵国日本に関する最新知識と共に、三国干渉についての「日本側の心情<sup>⑤</sup>」など、ドイツ国民からの非難を恐れぬ事情解説とが相まって、この時期における最大の知日派と目されていき、大戦後には日独両国の友好の礎となります。

一方、フローレンツの翻訳を掲載した縮緬本は、装丁が日本の伝統技術を結集した手作りの書物であることと、さらに彼のドイツ語版が重訳されて、同じ拵えで作られた英語版が普及したことも手伝って、ドイツや中部ヨーロッパだけでなく、広く欧米の国々へ日本の文化を紹介する大きな媒体になりました。

#### 基本的な参考文献と脚注

- (1) 『文明開化期のちりめん本と浮世絵』京都外国語大学付属図書館、2007年。146-148頁。
- (2) 石澤小枝子（著）『ちりめん本のすべて 明治の欧文挿絵本』三弥井書店、2004年。159頁。
- (3) 佐藤マサ子（著）『カール・フローレンツの日本研究』春秋社、1995年。218頁。
- (4) 中国の春秋時代の故事で、薪の上に身を横たえ、苦い肝を舐めながら自分を苦しめ、耐えて報復を期すこと。
- (5) 佐藤マサ子（著）前掲書。254頁。帰国後の講演「ドイツと日本」について、著者が説明する講演要旨の中での表現である。

おくまさよし（司書・事務長兼管理運営課長）